

御崎地区 歴史文化の視点3

13. 景勝・赤穂御崎

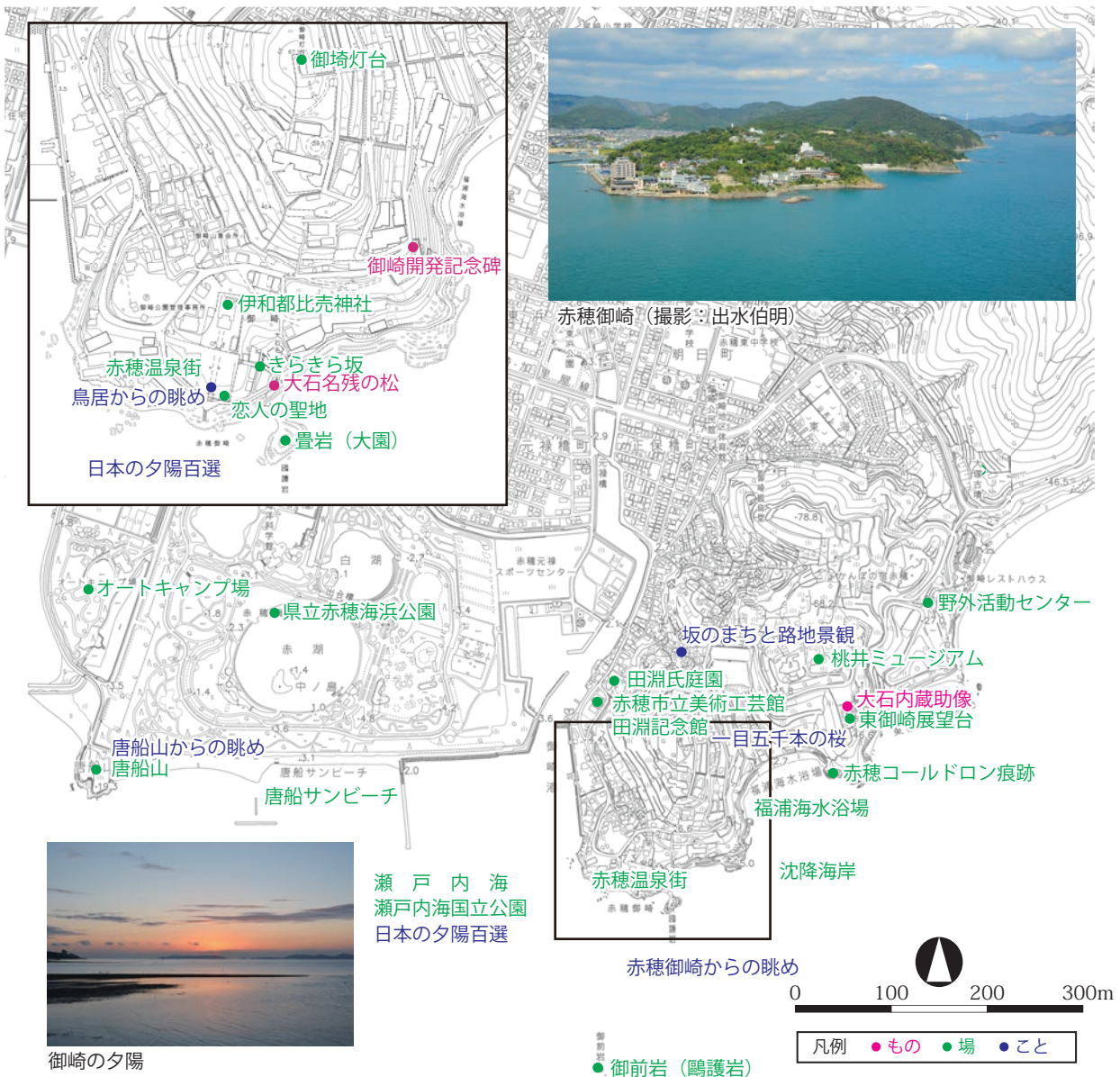
【ストーリー】

赤穂御崎は、江戸時代に司馬江漢が訪れ、『播州名所巡覧図絵』にも描かれるなど、「風景奇絶」と評された景勝地である。しかし瀬戸内海を活かした景勝・観光地としての開発は、実はすべてが順調ではなく、先人の労苦の賜物であったことが、「御崎開発記念碑」に刻まれており、その発展には、江戸時代からの長い歴史がある。

明治時代には、海水浴場として知られていたほか、旅館が開業。日本新百景、瀬戸内海国立公園などに選定・指定された。昭和45（1970）年、

塩田跡地の開発と共に「赤穂御崎温泉」が開湯、後に再掘削を経て、現在では「よみがえりの湯」として名湯百選に選定されている。

近年、風光明媚な景観が「日本のナポリ」と評されて注目を集めており、「きらきら坂」を中心とした古民家再生による店舗も増えている。さらに、江戸時代に浅野長矩によって現在地に移された伊和都比売神社周辺が「姫神」つまり縁結びの神として「恋人の聖地」に選定されるなど、新しいまちの魅力となっている。



御崎の夕陽

赤穂御崎（撮影：出水伯明）

瀬戸内海
瀬戸内海国立公園
日本の夕陽百選

赤穂御崎からの眺め

● 御前岩（鷗護岩）